

## ヴィクトリア朝マンチェスターにおける 文学の栄枯盛衰

小 宮 彩 加

ヴィクトリア朝時代のマンチェスターの文学というと、まずはじめに思いつくのは、1840-50年代に登場した社会小説のことであろう。これらは、英国最大の、つまりは世界最大の工業都市となっていた‘Cottonopolis’マンチェスターの繁栄の陰に存在した深刻な社会問題を題材とする小説である。代表的なものとして、Benjamin Disraeliの*Sybil* (1845)、Elizabeth Gaskellの*Mary Barton* (1848)や*North and South* (1855)、Charles Dickensの*Hard Times* (1854)などがあり、これらはいずれもマンチェスターや、マンチェスターをモデルとした架空の工業都市を舞台にしている。しかし工場法(1844)や10時間労働法(1847)などの制定により、労働者と資本家の間の問題が一通り落ち着いた後の、1850年代以降のマンチェスターは、ヴィクトリア朝文学とどう関わっていたのであろうか。本稿では、社会小説の誕生をも含む、マンチェスターの文学の発展と衰退について、社会的、文化史的背景とともに考察する。

ヴィクトリア朝マンチェスターに独特な雰囲気を与えていた最大の要素は、ユニテリアニズムの強さであろう。ユニテリアニズムは、キリスト教の正統的教義である三位一体説を否定し、キリストの神性を認めず、神はGodのみだとする宗派である。宗派としては小さなもので、1851年3月30日の日曜日に教会に出席した人の数、及びその教派別内訳を調べた宗教センサスによると、ユニテリアンの割合は、プロテスタント非国教徒の全体の1パーセント強に過ぎなかった。<sup>1</sup>しかし信者数は少なくとも、彼らは特に新興の産業都市において絶大な影響力を持っていた。合理的で、高い知性と改革に対する情熱が特徴であるユニテリアンは、近代化にうまく順応したので、社会的成功を収めることが出来た。功利主義を代表するジェレミー・ベンサム有名な言葉、「最大多数の最大幸福」が、実はユニテリアン牧師だったジョセフ・プリーストリーの言葉から取られたものであったことから分かるように、ユニテリアンは功利主義的産業精神に富む人々だったのである。マンチェスターにおいても、工場主や街の指導者的

立場にある人たちの殆どがユニテリアンだった。市内に4つあったユニテリアン教会の中でも最大のクロス・ストリート・チャペルに通うのは、マンチェスターの名士ばかりであったという。

For Cross Street was where the bourgeoisie of Manchester worshipped God. Fifteen M.P.s and seven mayors had connections with the chapel, besides many borough and county magistrates. The German merchants and businessmen of the city . . . belonged to it. The Trustees and members were the millocracy, the benefactors, the leaders, of Manchester's society: corn millers, silk manufacturers, calico printers, patent-reed makers, engineers; bankers and barristers; founders of hospitals, libraries, educational institutes, charitable funds, missions to the poor.<sup>2</sup>

マンチェスターにおけるユニテリアニズムの強さは、ここでの文学の発達を語る上でも重要な要素である。なぜなら、ユニテリアニズムはこの街の文学の需要と供給の両方に強い影響を及ぼしたものである。

まず、需要に関してだが、一般的に非国教徒には、文学は人心を信仰の道から外れさせるものとして危険視する傾向があった。しかし、ユニテリアンは文学に対して非常に寛大な宗派だったのである。ユニテリアニズムは、慈悲深い神の意図した完成 (perfection) に向かう人間の進歩を信じる楽観的な宗教であり、人間の義務はその完成に向けて積極的に行動することだと考えた。そのため彼らは知的好奇心が旺盛で、文化的教養も科学的発見も進歩を促すものとして歓迎したのだ。つまり、マンチェスターのユニテリアニズムは、小説を含む文学を抵抗なく受容する読者層が育つための宗教的背景を作ったのである。さらに、このように文学に対して寛大であったユニテリアンの中から、文学を供給する側の小説家が出てくるようになったのも不思議なことではない。実際、ハリソン・エンズワース (Harrison Ainsworth, 1805–82)、ハリエット・マーティノー (Harriet Martineau, 1802–76)、エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810–1865) などの、1840年代になって登場し始めた非国教徒の小説家たちは、いずれもマンチェスターにゆかりのあるユニテリアンたちだったのだ。<sup>3</sup> その中でも 'the Manchester Novelist' と呼ばれるエリザベス・ギヤスケルを取り上げて、彼女が作家となったことに、彼女のユニテリアニズムがどのように関わっていたのかを考察してみよう。

エリザベス・ギヤスケルは、1810年にユニテリアン牧師の娘として生まれたが、早くに母親を亡くしたため、チェシャー州ナッツフォードの叔母のもとで養育された。クロス・ストリート・チャペルの牧師をしていたウィリアム・ギヤスケルとの結婚を期に1832年にマンチェスターに移り、牧師の妻として、様々な慈善活動に参加するようになった。本格的に執筆を始めたのはマンチェスターに来て16年後の1848年だった。このとき書かれたのが『メアリ・バートン』(*Mary Barton*)であり、これはマンチェスターの労使間の問題を扱った小説である。彼女は慈善活動に関わるうちに知るようになった、マンチェスターの繁栄の裏にある問題をどうにかしなくてはならないと感じて、この作品を執筆したと述べている。ギヤスケルは『メアリ・バートン』の序文に、この作品を書いた目的を次のように説明している。

The more I reflected on this unhappy state of things between those so bound to each other by common interests . . . the more anxious I became to give some utterance to the agony which from time to time convulses this dumb people. . . . If it be an error, that the woes . . . pass unregarded by all but the sufferers, it is at any rate an error so bitter in its consequences to all parties, that whatever public effort can do in the way of legislation, or private effort in the way of merciful deeds, or helpless love in the way of ‘widow’s mites’, should be done, and that speedily, to disabuse the work-people of so miserable a misapprehension.<sup>3</sup>

ここにはいかにもユニテリアン的な考え方が現れている。ユニテリアニズムにおいては、原罪は否定され、神は慈悲深い神であるので、この世におけるいかなる悪も、神の意図である筈がなく、人間の過ちが原因であると考えられた。そして、人間が原因を作ったのであれば、人間に解決できないわけがないので、彼らは積極的にその改善に取り組んだのだ。例えば、1832年にマンチェスターでコレラが流行したときにも、他の街でのように、コレラは神から下された罰などと受け止めることはなかった。クロス・ストリート・チャペルに通うユニテリアンのジェームズ・ケイ医師が中心となった調査団が速やかに結成され、様々な衛生上の問題点が指摘されて、その改善が図られた。同じようにギヤスケルも、マンチェスターの抱える社会問題の数々は、神の意図に反するおかしなものだと感じたの

だ。そして彼女は、こうした問題を小説で取り上げることによって、その解決に一步近づかせることが出来ると考えたのである。<sup>4</sup> 実際には、いくらリベラルなユニテリアンであっても、同時に功利主義を信条とする工場主たちからは、『メアリ・バートン』は激しい反発を買った。しかし、彼女としては、ただマンチェスターの労使間の問題を率直に描くことによって、何か改善されればと純粋に考えていただけだったのだ。ギヤスケルは次のように手紙に書いている。

My poor Mary Barton is stirring up all sorts of angry feelings against me in Manchester; but those best acquainted with the ways of thinking & feeling among the poor acknowledge its *truth*; which is the acknowledgement I most of all desire, because evils being once recognized are half way on towards their remedy.<sup>5</sup>

事実に目を向け、悪を認識することこそ、改善への第一歩だという考えだったのである。ギヤスケルの作品の中に、実際にユニテリアニズムが言及されることはない。しかし、彼女のような作家が生まれたとは、マンチェスターと、彼女自身のユニテリアンのバックグラウンドの影響が大きかったのである。<sup>6</sup>

ユニテリアニズムが強かったために、マンチェスターでは文学に対し寛容だったということは既に述べたとおりであるが、これは1852年、国内初の公立図書館、マンチェスター・フリー・ライブラリーが建てられたことにも現れている。<sup>7</sup> 無料の図書館というのは、それ以前からもあったが、ブリティッシュ・ライブラリーがそうであったように、地位のある人からの紹介状がないと入館許可が得られない、という事実上の制約があった。しかし、公立図書館は、国や自治体の税金で運営され、あらゆる階級に開かれていたのである。1850年に公立図書館のための徴税を認める法律が制定されると、早速これを採択し、他の都市に先駆けてイギリスで最初の公立図書館を建てたのが、マンチェスターだったのである。当時のマンチェスター市長ジョン・ポッターをはじめ、マンチェスター・フリー・ライブラリーの建設に関わった人の多くが、クロス・ストリート・チャペルの会衆だったという。ここでも知識と教育を重視したユニテリアンが指導的だったことが分かる。

マンチェスター・フリー・ライブラリーの1852年9月2日の開館は盛

大に祝われた。エリザバス・ギaskellも、その開館を非常に喜び、自分の本を寄贈している。<sup>8</sup> 開館の式典には地元の名士に加え、ディケンズ (Charles Dickens, 1812–70)、サッカレー (William M. Thackeray, 1811–63)、ブルワーリットン (Edward George Bulwer-Lytton, 1803–73) という、当時を代表する 3 人の小説家も招待された。壇上で祝辞を述べたディケンズは、「マンチェスタースクールという言葉をよく耳にするが今までその言葉の意味が分からなかった」といってから、次のように続けたという。

Now I have solved this difficulty by finding here to-day that the Manchester School is a great free school bent on carrying instruction to the poorest hearths.<sup>9</sup>

このディケンズの言葉からも分かるように、別名を ‘Workman’s College’ といった公立図書館の最大の目的は、幅広い階層を読書により啓蒙することであった。そのような図書館が、イギリスでマンチェスターに最初に誕生したということから、この街の市民がいかに書物による教育を重視していたかが分かるであろう。記録によると、マンチェスター・フリー・ライブラリーに最初に入れられた 25000 冊の蔵書は、最初の一年間だけで計 13 万 8 千回貸し出されたそうだ。これは一冊につき 5 回は貸し出された計算になる。こうして市民生活の中心にマンチェスター・フリー・ライブラリーが開館し、読書はますます奨励され、マンチェスターの読者層は一層大きく育っていったのである。

マンチェスター・フリー・ライブラリーの開館から約 30 年後に、ロンドンに本社がある服飾用品会社から、ジョージ・ニューズ (George Newnes, 1851–1910) という男がマンチェスターに赴任してきた。ニューズは鋭い観察眼を持っており、商才に長けていたので、この街であるビジネスを思いついた。それから間もなくして、1881 年 10 月 30 日に、彼は『ティット・ビット』(Tit-Bits) という週刊新聞を創刊したのである。おいしいもののかげら という意味の ‘Tit-Bits’ という名前が示すように、これは編集者が他の本や新聞、雑誌から題材を選んでダイジェスト的な短い記事にして載せた刊行物だった。<sup>10</sup> その創刊日には、マンチェスター中心のマーケット・ストリートで、帽子に『ティット・ビット』と書いた鉢巻を巻いて、新聞の束を小脇に抱えた 100 人ほどの少年のパレードを行う、という宣伝の効果もあって、最初の 2 時間で 5000 部が売れたという。その後

も、読者から連載小説を募集して優勝者に 100 ポンドを贈る懸賞や、宝探しやクイズなどの企画、鉄道事故にあった人が『ティット・ビッツ』を持っていたら、遺族に保険金が支払われる仕組みの鉄道保険をつけるなどの斬新なアイデアにより、着実に読者を増やしていき、1890 年には販売部数が平均 50 万部という、世界で一番売れているペニーウィークリーになっていた。

リチャード・オールティックは、『ティット・ビッツ』の創刊により「安価なジャーナリズムの新時代が幕開けした」と述べているが、その『ティット・ビッツ』が、ここマンチェスターに生まれ、成功したということは、非常に重要な意味を持っているのである。<sup>11</sup> まず第一に、それはここには新しい雑誌を求める大きな読者層が育っていたことを証明している。ユニテリアニズムが支配的で、読書が奨励されてきていたことに加えて、マンチェスター・フリー・ライブラリーをはじめとする施設も整っており、他の都市よりも大きく熱心な読者層が育っていたマンチェスターであったからこそ、『ティット・ビッツ』も大成功を収めることができたのだと考えられる。

その一方で、このことはまた、19 世紀末以降、顕著になっていく読者層の 2 分化、そして文学の 2 分化という問題が、ここにはいち早く生じていただろうと考えられるのだ。ニューズはマンチェスターに来てすぐにこの 2 分化の兆しに気づき、従来のジャーナリズムとは異なるジャーナリズムの需要があると確信したのであろう。彼は、自分の目指すジャーナリズムを、従来のものと比べて次のように説明している。

There is one kind of journalism which directs the affairs of nations; it makes and unmakes cabinets; it upsets governments, builds up Navies and does many other great things. It is magnificent. This is your journalism. There is another kind of journalism which has no such great ambitions. It is content to plod on, year after year, giving wholesome and harmless entertainment to crowds of hardworking people, craving for a little fun and amusement. It is quite humble and unpretentious. This is my journalism.<sup>12</sup>

このような新しいジャーナリズムを受容したのは、それまでの読者層とは異なる新しい読者層だった。<sup>13</sup>

Q・D・リーヴィスは、ニューズとW・T・ステッド、アルフレッド・



ハームズワースの3人を名指しにして、彼らが代表するニュー・ジャーナリズムこそが読者層の2分化と全体的な低レベル化を引き起こした原因だと指摘している。<sup>14</sup> ニュー・ジャーナリズムの読者たちは楽に読めるものしか読まなくなってしまうので、高い思考力を要求する文学が読めなくなり、読書力が低下したというのである。しかし、文学需要の盛んだったマンチェスターでは、ニュー・ジャーナリズムの誕生以前から、既に読者の2分化の傾向は出てきており、ニューズはそこに目をつけたのではないだろうか。マンチェスターのユニテリアンたちが、進歩、改善を信じて進めた民衆の啓蒙と、それによる読者層の拡大は、読者全体のレベルの低下の要因も作ってしまう、という皮肉な結果をもたらしたのではないだろうか。

では、ニュー・ジャーナリズムの生まれた頃の、ヴィクトリア朝後期のマンチェスターには、『メアリ・バートン』のような優れた小説は生まれていなかったのであろうか。マーサ・ヴィシナスが指摘するように、ギヤスケル以後もマンチェスターで執筆に励んだ作家は何人もいる。<sup>15</sup> しかし、「全体としてみると、マンチェスターは優れた芸術も優れた文学も生み出せないと思う。木綿の質だって、落ちてきているくらいである」という1877年のラスキンの言葉の通りで、文壇をリードするような作家はマンチェスターにはいなかったというのが現実だろう。<sup>16</sup> 1872年から76年まで、マンチェスターのオーエンズ・カレッジで教育を受けたジョージ・ギッシング(George Gissing, 1857-1903)は、メレディスやハーディなどと共に後期ヴィクトリア朝を代表する作家であった。<sup>17</sup> しかし、14歳から18歳までの多感な青春時代の5年間をマンチェスターで過ごしているにもかかわらず、ギッシングの作品にマンチェスターが描かれることはなかった。もちろん、大学内での盗難の犯人として逮捕、投獄、退学、という不名誉な思い出がトラウマとなり、この町を扱うことが出来なかったということもあるかもしれない。しかし、この過去を乗り越えることができたとしても、エリザベス・ギヤスケルの書いたような、同情に満ちた‘A Tale of Manchester Life’はギッシングの筆からは生み出されなかったと思われる。

1880年代のギッシングはロンドンのスラム街に暮らした経験を生かして書いた、労働者階級の生活を描く小説に定評があった。しかし、彼がそのような題材を描くときのスタンスは、明らかにギヤスケルとは違っていた。彼は、小説によって現代社会の抱えている問題を解決したいなどという、ギヤスケルのような目的意識は持っていなかったのだ。彼はただ芸術

のために、題材と向き合ったのである。

My attitude henceforth is that of the artist pure & simple. The world is for me a collection of phenomena, which are to be studied & reproduced artistically. In the midst of the most serious complications of life, I find myself suddenly possessed with a great calm, withdrawn, as it were, from the immediate interests of the moment, & able to regard everything as a picture. . . . In the midst of desperate misfortune I can pause to make a note for future use, & afflictions of others are to me materials for observation.<sup>18</sup>

1889年以降になると、ギッシングは、労働者階級を題材とすること自体をやめてしまう。その理由も、労働者階級の生活が芸術と相容れないものであり、芸術のための小説の題材としてふさわしくないと確信するようになったからだ。ギッシングのこのような芸術観は、当時の唯美主義の流れと一致するものであるが、これは、マンチェスターがヴィクトリア朝文学の中心から離れていった理由を示唆してくれている。作家が社会的な意図も、目的も持たずに、ただ芸術のためのみに創作を行うようになった19世紀末においては、マンチェスターを取り上げる意味がなかったのである。芸術が工業社会の現実と切り離されたものになった時代では、マンチェスターから文学は生まれなくなったのである。

このように作家の創作意識が変化したことに加えて、マンチェスターの繁栄を支えてきたエトスが否定的に見られるようになってきたことも、この街から文学が生まれなくなった大きな要因の一つとして考えられる。この変化はディケンズ作品に登場する「マンチェスター・マン」の描写の変化にも現れている。例えば1839年出版の『ニコラス・ニクルビー』(*Nicholas Nickleby*)では、マンチェスターに実在したグラント兄弟をモデルにしたチアリブル兄弟という良心的な北の実業家が登場するのだが、1854年の『つらいご時世』(*Hard Times*)になると、功利主義の実業家はグラッドグラインドやバウンダービーのように否定的に描かれるようになるのだ。<sup>19</sup>しかし、レイモンド・ウィリアムズが述べているように、グラッドグラインドを非難することは、マンチェスターを繁栄に導いてきた考え方そのものを否定してしまうことなのである。<sup>20</sup>そしてこの変化はマンチェスター市民の意識にも見られたのだ。つまり、産業革命以後、社会改革を率いてきたマンチェスターのユニテリアン・ブルジョアジーは、富を得ると次には地位



を欲するようになり、宗教的にはユニテリアニズムから英国国教会に改宗し、政治的には自由主義から保守主義に変わり、そして仕舞いにはビジネスからすっかり手を引いて、マンチェスターを捨て、田舎でジェントリー的な生活に落ち着くようになってしまったのだ。<sup>21</sup> ギaskellの『北と南』(*North and South*)の中で、マンチェスターと思われる工業都市ミルトンの工場主のソーントンが、古典の個人授業を受けることにもこの傾向は現れている。古典教育のような実社会で全く利用価値のないものは、功利主義者たちから強く攻撃されていた学問である。エリザベス・ギaskellの父親で、ラディカルなユニテリアンであったウィリアム・スティーブンソンも、‘*Remarks on the Very Inferior Utility of Classical Learning*’ (1796) というパンフレットを書いているし、ソーントンの母親も、息子が古典教養を身につけることについて批判的なものだ。<sup>22</sup> しかし、ソーントンの世代のマンチェスター・マンは功利主義で成功した実業家になるよりも、古典などの教養のある紳士たることを目指すようになっていたのである。マーティン・ウィーナーがいうように、ヴィクトリア朝後期に産業精神が衰退したことは、マンチェスターの産業の衰退をもたらすことになるのだが、それだけでなく、マンチェスターの文学にとっても致命的だったのではないかと思われる。マンチェスターのエトスが否定されるようになって、誇りを失ったマンチェスターからは優れた文学が生まれなくなったのも無理はないのである。

\* 本稿は2002年11月16日に大手前大学にて開催された、ヴィクトリア朝文化研究学会第2回大会シンポジウム「都市と文化」における発表に基づくものである。

## 注

- 1 1851年の宗教センサスの結果については、浜林正夫著、『イギリス宗教史』(大月書店, 1991年), pp. 221–28 が詳しい。
- 2 Valentine Cunningham, ‘Mrs. Gaskell,’ *Everywhere Spoken Against: Dissent in the Victorian Novel* (Oxford: Clarendon, 1977) pp. 131–32. クロス・ストリート・チャペルのホームページ (<http://www.tbns.net/cross-street/history.htm>) にチャペルの歴史が簡単にまとめてある。1997年に新しく建てられたチャペルでは今でも Gaskell Society が定期的に関われているようだ。Herbert McLachlan, ‘Cross Street Chapel in the Life of Manchester,’ *Memoirs and Proceedings of the Manchester Literary and Philosophical Society* 84 (1941): pp. 29–41 も参照。

- 3 Elizabeth Gaskell, 'Preface,' *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* (London: Dent, 1996) pp. 3-4.
- 4 キャサリン・ティロットソンは、社会的目的のためのみに書かれた作品として、『メアリ・バートン』の文学的価値を見落としてしまっただけではないと述べている。Kathleen Tillotson, *Novels of the 1840s* (Oxford: Oxford UP, 1956) p. 222.
- 5 Elizabeth Gaskell, 'Letter 39a. 13 January 1849,' Ed. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard, *The Letters of Mrs Gaskell* (Manchester: Manchester UP, 1966) p. 827.
- 6 ギヤスケルのユニテリアニズムについては、Valentine Cunningham, 'Mrs. Gaskell,' *Everywhere Spoken Against: Dissent in the Victorian Novel* (Oxford: Clarendon, 1977) pp. 127-142; Monica Fryckstedt, *Mary Barton and Ruth: A Challenge to Christian England*. (Uppsala, 1982) pp 63-74; Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (London: Faber, 1999) pp. 5-7などを参照。
- 7 マンチェスター・フリー・ライブラリがあった場所には、今では Air and Space Museum が建っている。マンチェスター・フリー・ライブラリの歴史については、Gary S. Messinger, *Manchester in the Victorian Age: The Half-known City* (Manchester : Manchester UP, 1985) pp. 132-38 が詳しい。また、セントラル・ライブラリのホームページ (<http://www.manchester.gov.uk/libraries/central/history/pre.htm>) でセントラル・ライブラリの前身であるマンチェスター・フリー・ライブラリの当時の建物の絵を見ることができる。
- 8 寄贈にあたって、ギヤスケルはジョン・ポッター市長宛てに次のような手紙を書いている。

I wish to give 'Mary Barton' and another little book to the Free Library. But before I do so I should like to make a *private* enquiry of you . . . as to how far my giving (the former of) these books would be distasteful to you. Of course I cannot be unaware of the opinions which you and your brother have so frequently & openly expressed with regard to Mary Barton; and, as I feel great respect for all your exertions in behalf of the Library, it appeared to me as if it would be an impertinence on my part to send the obnoxious book to any collection in which you took an interest without previously asking you to tell me honestly if you would really rather that it was not included in the Catalogue? (Letter 130, 16 August 1852, *Letters of Mrs Gaskell*, 195-96.)

これは『メアリ・バートン』の題材を、1831年に実際に起こった Thomas Ashton 殺人事件に得たのではないかとされていたことを、ギヤスケル自身が否定したことで知られている手紙だが、この中で彼女が本を寄贈したいと願ったのが、マンチェスター・フリー・ライブラリだったのだ。Ashton 事件が『メアリ・バートン』のモデルであったかどうかという問題については、閑田朋子「Mary Barton: そのモデルと種本」『ギヤスケル論集』12 (2002): pp. 57-65 を参照のこと。

- 9 'Manchester Free Library: Opening Meeting' *Manchester Guardian* 4 September

- 1852: 8.
- 10 小池滋『島国の世紀：ヴィクトリア朝英国と日本』(文芸春秋，1987) pp. 116–26; Kate Jackson, *George Newnes and the New Journalism in Britain, 1880–1910: Culture and Profit* (Hants: Ashgate, 2001)などを参照。
  - 11 Richard Altick, *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800–1900* (Columbus: Ohio UP, 1998) p. 380.
  - 12 Hulda Friederichs, *The Life of Sir George Newnes* (London: Hodder, 1911) pp. 116–17.
  - 13 George Gissing の *New Grub Street* (1891) に，明らかに『ティット・ビッツ』と思われる『チット・チャット』という新聞が出てくる。『チット・チャット』の創刊者ウエルプデールによると，この新聞の編集方針は，「なんとか読むことはできるが，長いこと注意力を保つことはできない若い男女」が，「汽車や乗合馬車や鉄道馬車の中」で暇つぶしのために読むのに相応しい，「軽くて，くだらない」「おしゃべりのかげら」のようなものを集めて，「長くても2インチ」までの記事にするというものだ。Gissing, *New Grub Street* (Harmondsworth: Penguin, 1985) pp. 496–97.
  - 14 Q. D. Leavis, *Fiction and the Reading Public* (London: Chatto, 1965) p. 178.
  - 15 Martha Vicinus, 'Literary Voices of an Industrial Town: Manchester, 1810–70,' Eds. H. J. Dyos and Michael Wolff, *The Victorian City: Images and Realities* (London: Routledge, 1973) pp. 739–61.
  - 16 John Ruskin, 'Letter LXXXII, 13 September 1877,' *Fors Clavigera: Letters to the Workmen and Labourers of Great Britain* (Boston: Dana Estes, n.d.) p. 138.
  - 17 マンチェスター・フリー・ライブラリーの開館50年を記念する式典が1903年に開かれたとき，ギッシングは招待されるまでになっていた。フランスに滞在していたため出席はしなかったが，1852年に開館セレモニーに招待されたディケンズ，サッカー，ブルワーリットンのように，時代を代表する作家になっていたということが分かるだろう。1903年3月6日付のマンチェスター市長からの招待状を参照せよ。 *Collected Letters of George Gissing*, Eds. Paul F. Mattheisen, Arthur C. Young, and Pierre Coustillas. 9 Vols. (Athens, Ohio: Ohio UP, 1990–97) vol. 9: p. 67.
  - 18 Gissing, 18 July 1883, *Collected Letters of George Gissing*, vol. 2: p. 146.
  - 19 F. R. Dean, 'The Cheeryble Brothers,' *Dickensian* (1930): pp. 142–49; F. R. Dean, 'Dickens and Manchester.' *Dickensian* 34 (1938): pp. 111–18.
  - 20 Raymond Williams, *Culture and Society: 1780–1950* (Harmondsworth: Penguin, 1975) p. 105.
  - 21 Arnold Thackray, 'Natural Knowledge in Cultural Context,' *American Historical Review* 69 (1974): pp. 672–709 には，self-made Unitarian から Anglican conservative に3代にして変化した例が幾つも挙げられている。
  - 22 Elizabeth Gaskell, *North and South* (Harmondsworth: Penguin, 1995) p. 111.

fore, this rhetoric of “femininity” must also be associated with Gaskell’s strategies to survive as a woman writer.

## The Rise and Fall of Literature in Victorian Manchester

Ayaka KOMIYA

During the Victorian period, Manchester, Cottonopolis, became England’s and therefore the world’s largest industrial city. No doubt it was the bustling centre of business, but where did it stand in the world of literature? Manchester’s contribution to Victorian literature remains underrated. In fact, it was, at least for a time, the city that led Victorian literature. It was there that social novels were born; it was there that the era of ‘new journalism’ started. This paper presents a picture of how the Mancunian spirit helped literature to flourish, and then how its abatement resulted in the eventual decline of the city’s production of literature.

## Respectable and Single: The Wet Nurse Discourse in Victorian England

Motoko NAKADA

This essay examines how the wet-nursing practice evoked controversy in Victorian England at a time when the ideology of breast-feeding was prevalent among the middle-class. Though in slow decline, various discourses show that wet-nursing was still rather common in England. Some regarded a wet nurse as a troublesome servant, while others feared her as a source of moral and physical pollution. And the subject of wet nurses, especially those who were unmarried, excited controversy in medical journals where they were often criticized as immoral. In spite of this, classified ads show that wet nurses were sought